

はじめに

豊かな和楽器の世界

和楽器というとみなさんはどんなイメージをお持ちですか。盆おどりや祭りのときの囃子などで演奏される太鼓や笛の音などでしょうか。能楽という舞踊劇で使う鼓や、歌舞伎という芸能で使われる三味線などを知っていますか。和楽器は、明治時代に西洋から入ってきた、ヴァイオリン、ピアノ、クラリネットなどに代表される洋楽器とは別に、日本の伝統音楽の演奏に使われるいろいろな楽器のことです。歴史は古く、千数百年も昔から現代でも演奏されているものもあります。また古くは中国大陸や朝鮮半島から伝わったものもあります。よく日本の文化は、このように近くの国から、または明治時代には西洋からの影響も受けているといわれています。しかし和楽器は、わたしたちが音を楽しむくらしの中で、独自に発展し作られてきたものがたくさんあります。いろいろな和楽器を知り、どんな技術で作られ、どんな背景があるのか、いっしょにたずねてみましょう。知れば知るほど、日本の文化の深さを知り、和楽器のすばらしさがわかるはずです。



もくじ

和楽器の世界へようこそ・・・・・・4

- いろいろな和楽器を知る・・・・・・4
- 雅楽の楽器・・・・・・4 長唄・邦楽囃子の楽器・・・8
- 能楽の楽器・・・・・・6 祭囃子・神楽囃子の楽器・・・9
- 箏曲の楽器・・・・・・7



和楽器作りの技を見てみよう・・・・・・10

- 箏作りのスゴ技・・・・・・10
- 三味線作りのスゴ技・・・・・・12
- 尺八作りのスゴ技・・・・・・13
- 和太鼓作りのスゴ技・・・・・・14
- 奏者が組み立てる打ち物・・・・・・15



和楽器演奏の技を見てみよう・・・・・・16

- 箏の演奏・・・・・・16 尺八の演奏・・・・・・19
- 三味線の演奏・・・・・・17 締太鼓の演奏・・・・・・20
- 能管の演奏・・・・・・18 小鼓の演奏・・・・・・21



和楽器のある祭り・・・・・・22



水道管尺八作りにチャレンジ！・・・・・・24

もっと和楽器を知ろう・・・・・・26

- 音を楽しむ日本の文化・・・・・・26
- 日本の音楽を生み出し、引きつぐ楽器たち・・・・・・27
- 三味線のはじまりと広がり・・・・・・28
- アジアの中の和楽器・・・・・・29
- 広がる和楽器の活躍・・・・・・30
- 和楽器職人になるには・・・・・・31
- 和楽器奏者になるには・・・・・・31



■日本の伝統音楽である邦楽では、ジャンルにより、同じ楽器でもよび名や部位の名称の表記がちがうものがあります。本書は各ジャンル、楽器にあわせて表記しております。

和楽器の世界へようこそ

いろいろな和楽器を知る

和楽器は、演奏の方法で種類を分けるよび方があります。それは箏や琵琶、三味線などの「ひき物」、笛や尺八などの「吹き物」、太鼓や鼓などの「打ち物」などです。音楽ジャンルごとのいろいろな和楽器を見ていきましょう。

雅楽の楽器

鉦鼓

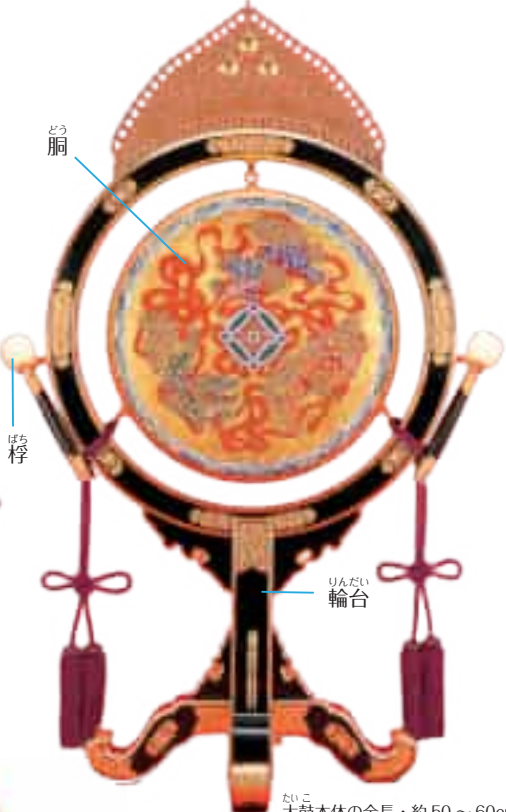
雅楽で唯一の金属楽器です。青銅で作られ、楽太鼓にわずかに遅れてチンと打ちます。



鉦鼓本体の全長・約 15cm
全体の高さ・約 80cm
全体の最大幅・約 29cm

楽太鼓

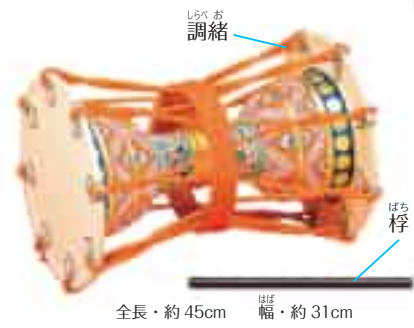
雅楽の舞台中央におかれ梓につすので鈞太鼓ともよばれます。胴にはあざやかな模様が描かれています。



太鼓本体の全長・約 50 ～ 60cm
全体の高さ・約 140cm
全体の最大幅・約 80cm

三ノ鼓

中央がくびれており、台に乗せずに左手で調緒をにぎって、右手で桴を持ち打ちます。



全長・約 45cm
幅・約 31cm

鞆鼓

曲のはじまりや終わりの合図を出したり、曲の速度など全体の流れで重要な役割をします。



全長・約 30cm
幅・約 25cm

細長い 2 本の桴で両面を横から打ちます。

笏拍子

歌のリズムを整える打楽器です。もともとは貴族が礼装に使用した笏（細長い板）に由来します。



管絃

神楽笛

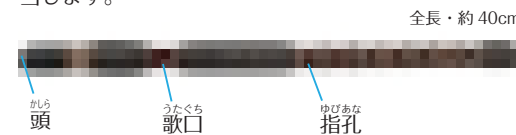
雅楽の神楽歌で使われるもので、指孔は 6 つ。龍笛より低くやわらかい音が出ます。



全長・約 45.5cm

龍笛

中国から伝来した唐楽で使われていたといわれています。横笛ともよばれ、指孔は 7 つあり、いきおいのある、すどい音で、旋律や装飾音を担当します。



全長・約 40cm

高麗笛

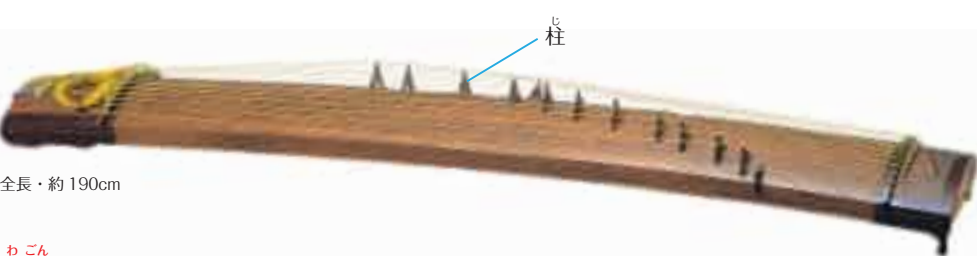
朝鮮半島から伝わった高麗楽や東遊に使われ、指孔は 6 つで、龍笛より高くすどい音が出ます。



全長・約 36.5cm

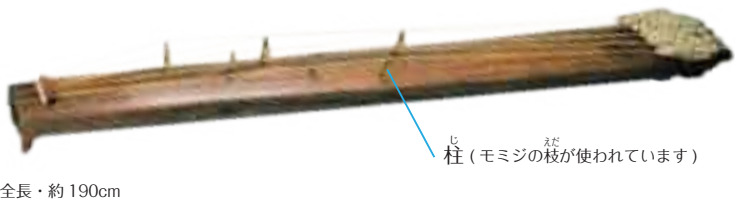
楽箏

雅楽に使われる 13 本の絃がはられた楽器で、現在の箏の原型といわれています。管絃の演奏では吹き物（笙、篳篥、龍笛）の旋律に沿ってリズムをきざみます。



和琴

6 本の絃がはられた箏で、古墳時代から日本にあったといわれ、楽器の祖先と思われる埴輪が出土しています。日本古来の神楽歌や東遊などで使われます。



全長・約 18cm
(蘆舌は約 5.5cm)

笙

17 本の長さのちがう竹をならべて、作られています。いくつかの音を同時に鳴らすことができ、ほかの楽器を包みこむような音が出ます。



舞楽「打球楽」



楽琵琶

雅楽で使われている、4 絃の琵琶で奈良時代に中国から伝来したといわれています。現在の琵琶より大きく、横にかまえて演奏します。

和楽器作りの技を見てみよう

箏作りの スゴ技

和楽器は美しい音色を奏でると同時に、見た目の美しさもたいせつに作られます。まずは、箏作りでのさまざまな作業から、どのような技が使われているのか見てみましょう。



箏は何でできている？

本体…桐という木でできていて、大きさのわりに軽いのが特徴です。船のようにくりぬいて、底に別に用意した板をはりあわせて作られています。
細工…紅木などのかたい木材、象牙などのほか、部分的に金属も使われます。
絃…絹やナイロンなどです。

抗菌や美しい木目を際立たせるために、表面を焼く「甲焼き」は、集中力を必要とする作業です。

箏作りの流れ

ここでは大まかな流れを紹介します。右ページでそれぞれの技を見ましょう。

- 1 サイズを確認 2 けずって調整 3 中をくりぬく 4 中をけずる 5 中を彫る



型をおいて、ひとまわり大きくしるしをつけます。



カンナでけずり、目安の大きさに整えます。



チョウナという道具でだいたいの深さにくりぬきます。



カンナで裏面をなめらかにけずります。



美しい「綾杉」とよばれる模様に彫ります。



底になる板を本体の大きさにあわせてはり、「締め枠」で固定してひと晩おきます。



焼きごてで表面に焼き色をつけます。



せつこう石膏の粉をこすりつけてから、米ぬかをまき、ブラシ状の道具でこするなどして、余分なこげを落としながら、木目を出します。



絃をはるための雲角や竜角、そのほか柏葉や電古などの飾りをつけます。

- 10 調絃
調絃（絃を締める作業）は販売店などでおこないます。絃ははると、のびたりいたんだりするので、購入者が決まってから調絃します。

甲羅どりの技



決められた曲線になるよう、型で曲線を確認しながら、カンナで少しずつづつ微調整をします。【箏作りの流れ 1・2】

同じ力加減でけずるために、呼吸を整えてカンナを動かします。

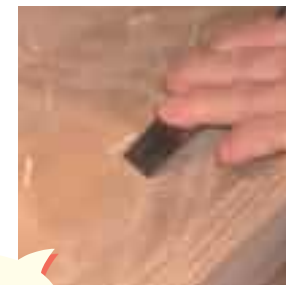


綾杉彫りの技



集中力を必要とする、とても繊細な作業です。

箏の裏には前後に音穴とよばれる穴があります。音穴から見える本体の裏側に、少しでも音がよくなるように、ノミで細かな模様を彫ります。【箏作りの流れ 5】

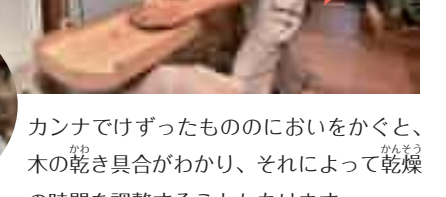


箏の裏側
音穴

中けずりの技



本体の厚さを決めるために、中をけずります。チョウナでだいたいの厚さにしてからカンナでなめらかにしあげます。【箏作りの流れ 3・4】



音の響き方に影響する作業です。

カンナでけずったもののにおいをかぐと、木の乾き具合がわかり、それによって乾燥の時間を調整することもあります。

甲焼きの技



鉄のこてを赤くなるまで熱したものを、表面にすべらせて焼き色をつけます。こての重さが本体に伝わると燃えたりへこんだりするので、微妙な力加減でこてを動かします。【箏作りの流れ 7・8】

箏の美しさを決めるたいせつな作業です。



余分なこげを落とすと、美しい木目があらわれます。



飾りの技



飾りとなる紅木に土台となる木をはりあわせ、けずって大きさをあわせませす。



柏葉とよばれる部分をつけるために、本体を浅くけずる前に型をとっているところです。

生田流の箏の電尾



象牙で作られた柏葉です。象牙はかたく形を作るのがたいへんなうえ、柏葉の縁だけを残した「すかし作り」はより高い技術が求められます。

柏葉

和楽器演奏の技を見てみよう

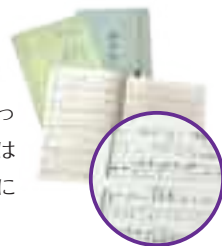
※和楽器の演奏は、流派や音楽の種類、各楽器の種類などによりちがいます。ここではそれぞれの一例をご紹介します。

箏の演奏

箏の演奏は流れるような美しい音の連なりが特徴のひとつです。演奏にはどんな技があるのか見てみましょう。山田流の萩岡松韻さんに教えてもらいました。

基本姿勢

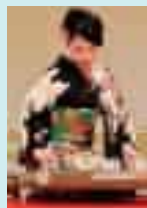
腰の右側が竜角より右へ出ない位置で、箏にまっすぐ向かって背筋はのばしてすわります。右手は親指・人さし指・中指に爪をはめて薬指を竜角に軽くそえ、左手は絃に軽くそえます。



山田流萩岡派の楽譜。上の段が箏、下の段が三絃（三味線）になっていて、箏では絃の名前が書かれています。

●生田流の場合●

箏に対してななめにすわり、右肩を少し前に出すのが基本の姿勢です。四角い角爪を使い、その角で絃をひくのも特徴です。



市為斗十九八七六五四参式壱
箏の絃は手前（写真左）のほうが高い音になります。

右手の奏法

基本

親指・人さし指・中指に丸爪をつけ、親指は奥へ、人さし指・中指は手前にひき、それぞれ次の絃でしっかりとめるのが基本です。絃はかたく、指先だけではよい音は出ません。体全体でひきます。

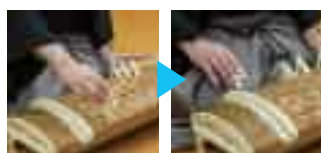
かき爪

ならんだ2本の絃をす早くひき、「シャン」と音がきこえるようにする奏法です。



引き連

中指で、壱・弍をかき爪してから手前（高い音）へまで、最後に為・巾をひきます。



輪連

中指の爪のわきで、右上から絃の表面をする感じで、左の方向へ輪を描くように動かします。



左手の奏法

基本

左手で柱の10～15センチ左側の絃をおすことで、箏の甲につくまでおすと一音高く、途中までおすと半音、音を高くすることができます。この技を使い、「押し手」では絃をおして音程を変えてからひきます。「押し放し」では絃をおしてひいてから放し、「後押し」ではひいてからおすなどして、音程を変えて音色に変化を出す奏法があります。



調絃

箏は演奏のとき以外は柱をはずしておきます。演奏ごとに柱を立て、柱の位置を動かして音階を調整します。平調子や雲井調子など、曲にあわせて調絃します。曲によっては、途中で転調する場合もあります。

三味線の演奏

三味線は、長唄や民謡などいろいろな音楽で使われます。3本の糸で奏でる幅広い音色は、どのように生まれるのでしょうか。長唄東音会の東音小島直文さんに教えてもらいました。

基本姿勢

背筋をまっすぐのばしてすわり、三味線の胴を少し手前にかたむけて右ももに乗せ、胴かけの上にばちを持った右手を乗せて、三味線を固定します。左手は肩をあげないようにして、棹を下からささえる形でかまえます。



長唄の楽譜です。写真上は古典の曲、下は小島さんが作曲した手書きの楽譜です。

立奏

長唄の中の大薩摩という音楽で、立って演奏をするときには台（合引）に右足を乗せてかまえます。

指かけですべりよく

左手は棹にそって、上下にす早くなめらかに動かすために、人さし指と親指に指かけをはめます。



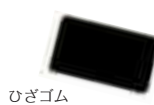
ばちの持ち方

人さし指・中指・薬指を曲げ、そこにばちをおき、小指を内側にかけ、親指をばちの広がった部分に乗せると、安定した形になります。ひくときは手首を直角に曲げます。



足と右手だけでささえる

三味線の胴を乗せる部分にはひざゴムというすべり止めをはさみ、右手を上から乗せるだけで、三味線をささえています。左手をおろしても三味線が動かない状態が正しい姿勢です。



右手の奏法

基本

ばちをふりあげ、一気にばち先を糸にあて、ばち皮までふりおろします。糸を見ずに3本の糸をひき分けるには修練が必要です。



スクイ

三味線の糸をひき、そのままばち先で糸をすくいあげる奏法です。



カエシ

手首を返し、ばちの裏側で下から上へ糸をひきます。三の糸から一の糸へ連続してひくときに使います。



左手の奏法

基本

親指のつけ根に棹をあて、人さし指を曲げて指先と爪で上からしっかり糸をおさえます。中指と薬指も使います。棹には音階のしるしがありません。その中で、上下に左手を動かして音階を作る技が求められます。おさえる位置は「勘所」といわれ、耳や体で感覚を養います。



ハジキ

左手の指で糸を下にはじいて、強い音を出す方法です。写真は薬指ではじいていますが、おさえる勘所により、3本の指を使い分けます。



スリ

指で糸をおさえたまま、上下に動かす奏法です。音階では表現できない音色が生まれます。

